

## 大谷大学のチベット研究ことはじめ

——小栗栖香頂と寺本婉雅——

三宅伸一郎

はじめに

みなさんこんにちは。本日は、「大谷大学のチベット研究ことはじめ」という講題で、しばらくお話をさせていただきます。この場合は、仏教学会の新入生歓迎講演会の場です。にもかかわらず講題からは仏教の感じがしない。どうなっているんだ、と不思議に思う方も多いと思います。そもそも「チベット研究」というものは仏教と全然関係ないのではないか？と思うかもしれません。チベットに対する研究、特にチベットの文化や歴史、宗教に対する研究は、世界中でおこなわれています。その中で、日本におけるチベット研究の特色がどこにあるのかと考えてみると、仏教研究の一環としてチベット研究が始まったという点が挙げられます。その意味で日本のチベット研究は、仏教に対する「学び」と非常に密接に結びついているわけです。

また、副題に小栗栖香頂おぐりすこうかとう（一八三一―一九〇五）と寺本婉雅てらもとえんが（一八七二―一九四〇）とあります。これも後に述べますが、大谷大学では古くから、チベットに対する研究、特にチベットの仏教に対する研究が進められてきました。その基礎を築いた人物が誰かという点、寺本婉雅という人なのです。この人が実質的に大谷大学でチベットに対する研究や教育を推進した初めての人になります。その意味で大谷大学におけるチベット研究の祖が寺本婉雅という人です。

では一方の「小栗栖香頂」とはいったい誰か？ですが、この人は大谷大学の設置母体である真宗大谷派・東本願寺の僧侶で、明治のはじめに北京に一年間留学した人物です。彼は寺本婉雅より三十年ほど前の人ですが、北京留学中にチベット仏教に着目し、これを学ぼうという姿勢を見せました。ですから、大谷大学と直接関係はありませんが、母体となっている真宗大谷派・東本願寺の人物ということで、今回、とりあげてみたいと思っています。

本題に入る前にまず、チベット研究について定義しておきたいと思っています。ここで言うチベット研究とは、チベットという地域の言語・宗教・文化・歴史・社会などに対する研究、いわばチベットを対象とした人文学的研究を指します。実は、日本でチベットについてどのような研究がなされているのかを、例えば、ONISで単純に「チベット」という言葉で検索すると、「チベットにおけるガンマ線の観測」といったような理系の研究がヒットします。私がここで述べる「チベット研究」とは、こうした理系の研究は除く、あくまでも人文科学の枠組みの中での研究を指します。具体的には、チベットの文化や社会、歴史、言語などを扱う研究と定義しておきたいと思っています。

### チベットの宗教

では、これから話を進める中にチベットの宗教の話が多く出てきますので、その辺りを少しだけ簡潔に説明しておきたいと思います。チベットの宗教というと、多くの人が「チベットは仏教が盛んだ」と連想すると思います。確かに仏教信者は、チベット人の中でも多数派です（ただし具体的な統計はないので、あくまで感覚に基づく見解です）。しかし、ご承知の通り、仏教はインドで生まれたもので、チベットで生まれたものではありません。おおよそ七世紀後半頃に、チベット人はインドと中国から仏教を導入しました。特に八世紀後半になるとチベット人たちは、もともとインドのサンスクリット語という言語で書かれていた仏教の経典を、自分たちの言語であるチベット語に翻訳するという作業を、集中的におこなってゆきました（いくつかの経典については、漢訳からの翻訳がおこなわれています）。そして、時代が経

ち、おおよそ一二世紀以降になると、こうして翻訳された經典に基づいて、教義が組み立てられ、様々な宗派が誕生してゆきます。そして一三世紀以降になると、チベットで熟成された仏教は、モンゴルへと広まってゆきます。

チベットの宗教というと仏教が多数派なので、仏教を連想する人が多いと思いますが、一方で「ボン教」という宗教も存在します。このボン教という宗教の定義はなかなか難しいのですが、極めて簡単に言えば、仏教伝来以前の土着の信仰要素の上に、仏教に学んだ教義を乗せている、これがボン教という宗教です。この宗教の信者、つまりボン教徒 (bon po) たちは、自分たちの宗教の開祖であるシェンラブ・ミボ (Shen rab mi bo) は仏陀であり、その意味で自分たちが信じている教えは仏陀の教え、つまり仏教だと言います。これが非常に面白い。実は、私の研究のメインテーマはボン教なのですが、最初に衝撃を受けたのがこの点なのです。何故衝撃を受けたのかというと、初めてチベットのボン教寺院を訪問した時のことです。その時は何も知らず、仏教との相違点はどこにあるんだろうか？との単純な興味から、ボン教のお坊さんに「ボン教は仏陀の教えじゃないのですか？」と質問したのです。その時に、そのお坊さんは、烈火のごとく怒り、「ボン教が仏陀の教えでないと言うなら、ここから出ていけ」と言ったのです。その時はよく分からなかったのですが、その後、自分でボン教の様々な文献を見てみると、確かに、仏陀の教えだ、と書いてあるのです。

そのあたりのことを分かりやすく示すと、例えばこの絵ですが少し仏画に関心がある人なら「これは釈尊の像だ」と思うでしょう。しかし、実は違います。これはボン教の開祖シェンラブ・ミボの像なのです。右手の先を地面に付けて、触地印の姿を示しているという点も類似していて、ほぼ同じと言ってもよいでしょう。このように全く見分けがつかないのに、どうしてこれがボン教のものだと言えるのかというと、よく見ると、触地印を示している右手にボン教のシンボルである卍があらわれた法具 (チャクシン chags shing) を持っているのに気がつくと思います。そしてシェンラブ・ミボの周囲に描かれている人物は、青い帽子をかぶっています。青はボン教のシンボル・カラーで、この

帽子は、ボン教独自の帽子です。そうしたところからこの絵がボン教の、そしてシエンラプ・ミボの絵だと分かるのです。変な言い方をすると、これがボン教開祖シエンラプ・ミボの絵と分かるのはボン教徒だけで、ボン教徒が見ればそうだと分かるのですが、仏教徒が見ると見分けがつかず混乱する、ということではないかと思えます。こうした点から、ボン教は教義を作り上げる際に、仏教の教義を学びこれを採り入れていったということが、おぼろげながら理解していただけではないかと思えます。

以上、チベットの宗教について簡単に説明しました。ここでは、仏教とボン教しか挙げておりませんが、非常に数が少ないですがキリスト教徒やイスラーム教徒の人たちも存在することを付言しておきたいと思えます。

## 大谷大学のチベット研究

さて、大谷大学のチベット研究という本題に入っていきたいと思えます。大谷大学は今日お話しする寺本婉雅以来、長い間チベット研究に従事する研究者を輩出してきました。その全てを挙げると書ききれないので、代表的な人だけを紹介したいと思います。一人は櫻部文鏡という方です。この方はチベット大藏経のうちの「カンギユル」——チベット語に翻訳された仏典の中でも仏陀の直説であるとされるもの——その目録を作成するという大きな業績をあげた方です。次に挙げるのが山口益という方です。この方は「仏教チベット学」というものを提唱しました。面白いのは「チベット仏教学」ではなく「仏教チベット学」となっている点です。彼は、大乘仏教を研究する上で、チベット語に翻訳されたものも見ないと駄目だ、チベット語に翻訳されたものを中心にして、サンスクリット語の原典や漢訳を比較対照して研究をおこなうべきだ、と提唱し、それを自ら仏教チベット学と名付けました。いわば、仏教を研究するためにチベット語訳の仏典を中心に据えるという意味での「仏教チベット学」なのです。

櫻部文鏡と山口益の二人はともに、今日お話しする寺本婉雅の学生です。現存する寺本婉雅の日記のうち、大正一

○年四月一九日の記事にこのように書かれています。

午前九時真宗大学新学年に出講す。本学年度は研究科と予科第一第二の三級を担任す。研究生は桜部文鏡君なり。大正八年夏第一回西蔵語科卒業の山口益君の研究科に入りしより計二名なりとす。

ということ、寺本にとつて最初の学生が山口益で、次に櫻部文鏡が入つてきて学生になつたということが書かれています。この日の記事にはさらに、「その他研究科に入らずして研究せる加藤潔君あり。専ら西蔵語活字鑄造に付て尽力しあり」とあつて、当時、チベット語の活字を作る専門の学生がいたことが分かります。

山口益の次の世代の人として、稲葉正就という方がいらつしゃいます。この方はチベット語の文法、そしてチベット仏教史についてたくさんの業績を残されています。以降、多くの先生方がチベットの研究に従事されましたが、ここに挙げておかないといけないのは、ツルティム・ケサン先生です。ツルティム・ケサン先生はチベット人で、もう来日して五十年以上になります。私の先生にあたる方です。大谷大学はもちろんです。関西でチベット研究に関わる現役あるいは現役を退いている方々で、先生の薫陶を受けていない者はいないと言ひ得るでしょう。それほど先生は、関西のチベット研究、さらには日本のチベット研究に大きく影響を残した方です。

大谷大学のチベット研究について一言付け加えておきたいと思ひます。仏教学を設置している大学にはチベット語という授業が開講されています。他の大学でチベット語といった場合、それは古典文語を読むための授業です。ところが大谷大学の場合は、それに加えて現代チベット語、つまり今使われている口語としてのチベット語の授業が開講されている、これが大きな特色かと思ひます。過去の経緯を調べてみると、現代チベット語を内容とする授業が開講されたのは一九八〇年のことで、ツルティム・ケサン先生が着任してからののです。ではなぜ、こうした現代チベッ

ト語の授業が開講されたのでしょうか。ネイティブの先生が着任されたということも大きいのでしょうか、チベット研究をおこなうには、古典の文献を読むだけでなく、口語も習得し、実際にチベット人たちとコミュニケーションをとっていく必要があるということを重視したからではないかと思えます。以上、前置きが長くなってしまいましたが、ではいよいよ本題の小栗栖香頂と寺本婉雅について、話を進めてゆきたいと思えます。

### 小栗栖香頂の北京留学と喇嘛教（チベット仏教）

まず先に、小栗栖香頂という人の事績について見てゆきたいと思えます。小栗栖香頂の事績については、本学で近代日本仏教史を講じておられた木場明志先生がまとめたものがあります（木場二〇〇四）。もう少し詳しく小栗栖香頂という人の事績について見てみたい方は、それをご覧いただくとよいと思えます。

小栗栖香頂は、ちょうど明治維新で仏教が大きく変化せざるをえなくなった状況下で活躍した人です。彼の事績の中で特に注目したいのは、四三歳から四四歳の間（明治六／一八七三～明治七／一八七四）、清朝末期の北京に留学している時のことです。そもそも彼がなぜ北京に留学したのかというと、中国仏教の状況視察と中国語の学習のためでした。ここでいう中国語とは、口語としてのそれです。では、中国語の口語を勉強して、中国仏教の状況を視察したうえで何をしたいのかというと、「護法之大策」、つまり、仏教をいかにして守っていくか、具体的には、西欧から押し寄せてくるキリスト教の波からいかにして仏教を守っていくのか、その方策を中国の偉いお坊さんに直接聞きたい、というのが北京留学の大きな目的でした。そうした目的を持って、彼は北京に行くのですが、そこで感じたのは、いわゆる中国仏教、分かりやすく言うと、漢文のお経を読む人たちはあまり力を持っていないということでした。では、一番力を持っているのは何かというと、「喇嘛教」だと気が付いたのです。「喇嘛教」とは、当時使われていた言い方で、チベット仏教のことを指します。小栗栖は北京に行き、最初は中国語を勉強しつつ、まず、中国仏教の僧侶たちと交

友を深めます。しかし次第に、喇嘛教すなわちチベット仏教の僧侶たちが、清朝皇帝の援助を受けるほど強大な力を持っていること認識したのです。喇嘛教とはいったい何なのかと関心を抱いた彼は、北京にあるチベット仏教・喇嘛教の寺院を次々と訪問してゆきます。清朝皇帝はチベット仏教の大施主でしたから、都の北京にはいくつものチベット仏教寺院があつたのです。

寺院を訪問し見聞を深めてゆく中で彼は、喇嘛教とはいったい何なのかということを経験的に探っていくかなければいけないということで、北京のチベット仏教寺院にいる僧侶たちをいわば先生にして、チベット語を勉強しようと思ひます。彼は、安政五年（一八五八）すなわち二七歳の時から亡くなる直前まで『八洲日曆』と題する日記を書き綴つていて、これは現在、大谷大学の図書館に所蔵されています。この日記の明治七年の三月一九日の記事に、次のような記述があります（下駄字は解読不能箇所を示します。以下同じ）。

此日■■■■雇車護国寺ニ至ル。……（中略）……一喇嘛ノ房ニ入ル。……（中略）……予曰ク、我学西藏字■■■■。他云我教爾。於之西藏字六■■ヲ出シ、我ニ送ル。其中一列ヲヨムニ、カカカカ、サササニヤ、タタタニヤ、チャチャチャ、パアー、ヤララバア、シャー■■■■似タリ

「護国寺」というのは北京にあつたチベット仏教の寺院です。「一喇嘛」というのはそこにいる僧侶のことを指します。その僧侶の部屋に入ってチベット語を勉強したいと申し出た。すると、相手は「私が教えましょう」と言つてチベット文字を書いたものを出して、自分にくれた。そして、その中の一行を読んでくれた。「カカカカ、サササニヤ……」とあるのは、その僧侶がチベット文字を読んだ時の発音を、小栗栖がカタカナで記録したものです。カタカナで発音を記録して勉強するという方法は、彼が中国語を勉強する際も用いていた方法でした。北京滞在時の出来事を

口語の中国語で書き記した『北京紀遊』と題するものが残されています。全ての漢字の発音がカタカナのルビによって示されています（『北京紀遊』の影印・翻訳は、陳二〇一六にあり）。ともかくも小栗栖はこうやってチベット語を勉強しよう、まず、チベット文字の読み方を勉強しようと試みました。ただ、一人の師に師事して勉強するというものではありませんでした。自分が行った寺院で相手にしてくれた僧侶に聞いていくという方法をとっていたようです。ただ、非常に面白いのは、人によって発音が違うことを注意深く記録していることです。小栗栖は後に、喇嘛教・チベット仏教の歴史と若干の教義を概説した『喇嘛教沿革』（明治一〇／一八七七年刊行）という一書を著します。その中で彼は、チベット文字について説明しているのですが、そこに、「*ཀ*字ハ音略ナリ、普海氏ハ「ハ」ノ音トス」という記述が見られます。これは、「この *kha* というチベット文字は「カ」と読むが、普海という人は「ハ」と読んでいる」という意味です。チベットは広大ですから、同じ文字でも地域によって読み方が異なりますし、チベット仏教を学ぶモンゴル人僧侶たちも、また異なった読み方をします。そうした文字の読み方、あるいは発音に違いがあることに気付いて、それを細かく記録している点は、とても面白いと思います。

### トンコル・フトクトとの出会いと留学生派遣計画

ともかくこのようにして喇嘛教・チベット仏教の寺院を訪問し、そこで僧侶たちにチベット語を学んでいく中で、小栗栖は、ある人物の名前を聞きます。北京最大のチベット仏教寺院「雍和宮」にいる高僧で、咸豊・同治・光緒の三代にわたって皇帝の師を務めているというトンコル・フトクト（洞濶爾胡図克図）です。その名前を聞いた彼は、雍和宮に赴き面会を求め、明治七年（一八七四）五月二日、ついに対面することができました。このトンコル・フトクトとの出会いは、小栗栖にとって大きな出来事でした。なぜなら、トンコル・フトクトこそ、小栗栖の喇嘛教・チベット仏教への関心を決定づけた人物であり、最大の情報提供者だったからです。小栗栖はトンコル・フトクトに、チベ

ット文字を書いてもらったり、チベット語の『白傘蓋総持陀羅尼經』や五台山の絵図をもらったり、五台山に赴く際、紹介状を書いてもらったりしています。また、雍和宮における護摩法要の見学もさせてもらっています。小栗栖が北京を離れる際、トンコル・フトクトは、わざわざ小栗栖の下宿先まで見送りに来ました。「皇帝の師であるのに私ごとを見送りに来てくれた」と小栗栖は大変感激します。一方の中国仏教僧は誰も来ない、「薄情だ」と感じます。トンコル・フトクトのこうした行動は、小栗栖の喇嘛教・チベット仏教に対する好感を決定的にしたのでした。

なお、トンコル・フトクトは、衆生救済のためにあえて人間として姿を現したとされる「化身ラマ」といわれる、チベットに存在する特徴的なタイプの僧侶の一人です。このタイプの僧侶は、衆生救済のために、意思を持つてあえて転生を繰り返すとされ、転生者とされる者はその前世者（先代）の名前も受け継ぎます。トンコル・フトクトというのは転生者に受け継がれる名前ですから、この名前を持つものは歴史上何人もいます。小栗栖は、当時——すなわち明治七／一八七四年——のトンコル・フトクトの年齢を五五歳と記録していますから、小栗栖の出会ったトンコル・フトクトは、一八二〇年生まれ、トンコル・フトクト九世トウプテン・ジクメ・ギャムツォ (Tong Khor Thub bsuan jigs med gyas mtsho, 一八二〇—一八八二) だということが分かります。

さて、小栗栖は自らチベット語を勉強しようと試みますが、彼自身にはあまり時間がありませんでした。北京留学の後半になると、体調を崩して帰国を決断せざるを得なくなります。それが原因なのかわかりませんが、『八洲日曆』明治七年五月二〇日の記事には次のような興味深い記述を見ることができます。

雍和宮ニ至リテ喇嘛ニ面シ我徒弟九月或ハ来年ニ入門サセタナラバ一月ノ■代ハイカホドナリヤト問ニ、喇嘛云ク我門人トナレバ不要錢ナリ。又問西藏ノ一切経ヲ求メ■キ也。■一百巴ナリ。価ヒ七百両ト■ナリ。本邦金千金以上ナリ。

雍和宮でトンコル・フトクトと面談した際に、「九月あるいは来年に、自分の弟子を雍和宮に留学させたら学費がいくらかかるのか」と尋ねた。するとトンコル・フトクトは「私の門人であれば学費はいらぬ」と答えてくれたというのです。トンコル・フトクトが、小栗栖からの留学生派遣の申し出を快く受け入れてくれたというのです。

さらに、「又問西藏ノ一切経ヲ求メ■キ也」とチベット一切経、つまりチベット大蔵経を購入したいと申し出ています。このように小栗栖は、自分の弟子、若い人たちにチベット語を勉強し、チベット語の仏典を勉強してほしいと思ひ、チベット大蔵経の購入と雍和宮への留学派遣という計画を持っていたことが窺えます。

この計画は、その後どうなったのでしょうか。明治一九九年に出された『教学論集』（第三編、二〇―三頁）という雑誌の中に、小栗栖の「贈北京僧頓澗呼図克函書」という、北京のトンコル・フトクトに宛てた手紙が収録されています。そこにこのようなことが書かれています。

昨年請以弟子遊學之事。閣下毅然諾之曰、衣服可携焉、飲食予与。頂深感厚意。本年募西遊者、未獲其可者。明年九月、必差之。伏乞容之。頂欲使其學西藏經。

去年私が弟子の留学のことについて相談したところ、閣下は快諾し、次のように言ってくれた。「衣服を持って来ただけでよい。飲食は予が与えよう」と。私は深く感謝しています。今年西遊つまり北京に留学する者を募集したけれども、ふさわしい者がいなかった。来年九月になったら必ず派遣しますから、どうか受け入れてください——そう書かれています。では、留学生派遣の目的は何だったのでしょうか。それが最後に明確に記されています。「頂は其れをして西藏経を学ばしめんと欲す」と。つまり、チベット語仏典の学習が、トンコル・フトクトのもとへの、雍和宮への留学生派遣の目的だったのです。留学生受け入れの承諾を受けて帰国した小栗栖は、適任の人物を探したよう

すが、帰国の翌年・明治八年（一八七五）時点では、まだ適任者が見つからず、留学生派遣は実現していなかったことがこの手紙から分かります。その後の記録を見ても、雍和宮に留学した日本人の記録はありません。ですから、この小栗栖の雍和宮への留学生派遣計画は、結局のところ頓挫したのではないかと思えます。ただ少し気になるのは、この計画が小栗栖個人の考えだったのか、それとも彼が所属する東本願寺の意向を受けてのものなのかという点です。この点は、今後解明していく必要があるように思います。次に述べる寺本婉雅も小栗栖と同様に真宗大谷派の僧侶ですが、彼らのチベット行きとこの留学生派遣計画の間に関係があるのか、今後研究していく必要があります。

小栗栖香頂という人は、ともかく自ら北京で喇嘛教・チベット仏教の力が強いということに気付き、チベット仏教を勉強するためにチベット語を勉強しようと考えた。さらに留学生派遣とチベット大蔵経の購入を計画した。こうした点から、彼を、日本のチベット研究の基盤を築こうとした日本のチベット研究の祖と評価することができるのではないかと思います。彼が著した『喇嘛教沿革』はその後、およそ大正初年に至るまで信頼しうるチベット仏教の専門書とみなされてきました（高本二〇一〇・四五頁）。その意味でも、日本のチベット研究における小栗栖の影響力を見ることができるといえるでしょう。

### 寺本婉雅の生涯とその評価

次に寺本婉雅という人の話に移っていきたいと思います。寺本の事績を最初から話すと時間が足りないのです、特にチベットとの関わりのあるところだけを簡単に紹介しておきたいと思えます。彼は、一八九八年から一九〇八年までの二十年間ほどの時間を、主にチベット旅行・留学など、チベットとの関わりに費やしていた人物です。

その二十年間のことを、少し詳しく説明します。一八九五年に、大谷大学の前身となる真宗大学に入学した寺本は、卒業直前の一八九八年六月、退学してチベットを目指します。なぜチベットを目指したのか、明確な理由はわかりま

せんが、当時、若い仏教者たちの間には、仏典のサンスクリット語原典を入手するためにチベットに行こうという「入藏熱」がありました。彼もそうした「熱」の中でチベットを目指すようになったのかもしれない。中国大陸に渡り、一八九九年六月、四川省の打箭爐タジャン (Darise mdod, 現在の四川省康定) で、同じくチベットを目指す真宗大谷派の僧・能海のうみやう寛ゆたか (一八六八―一九〇三) と合流します。そして寺本は能海とともに、同年七月二〇日東チベットのリタン (Dang, 裏塘) に、さらに西に進んで八月一日にはバタン (Ba thang) に足を踏み入れます。これによって、彼ら二人は日本人として初めてのチベット入境者となりました。チベットと言っても、彼ら二人の目的地は東チベットではなく、チベットの都ラサ (Lhasa, 拉薩) でした。二人は、バタンからさらに西へ、ラサへと向かおうとしますが、許可が下りず、これを断念せざるを得なくなりました。帰路についた二人は打箭爐で別れ、寺本は帰国します。一方の能海は打箭爐に滞在し、別のルートからのラサ入りを目指しますが、雲南省で帰らぬ人となってしまいました。

一九〇〇年、中国 (当時は「清」) で義和団事件が発生します。鎮圧を名目として、日本を含む八カ国の軍隊が中国に出兵しました。その際、寺本は、日本の陸軍通訳として北京に入り、北京版をはじめとするチベット大藏経を入手し、これを日本にもたらすことに成功しました。一九〇一年には、雍和宮貫主アキャ・フトクト (A kya sku pheng lnga pa Blo bzang bstan pa'i dbang phyug bsod namu rgya msho, 一八七〇/七一―一九〇九) 一行を日本に招きました。そして再びチベットを目指す旅に出て、一九〇三年二月二六日、東北チベット・アムドのチベット仏教ゲルク派の大寺院クンブム寺 (Kun bum byams pa gling, 塔爾寺、青海省西寧市湟中区にあり) に到着し、ここに二年間滞在し、チベット語文献の研究に励みます。そして、一九〇五年二月二四日、塔爾寺を出発し、五月一九日、念願のラサに到着しました。ラサに三週間ほど滞りし、インドのカルカッタを経由して同年一〇月四日に帰国しました。

翌一九〇六年四月に日本を出発し、八月二三日に再びクンブム寺を訪れます。そして同寺に滞在し、「喇嘛教史」(一九二〇年に「西藏喇嘛教史」のタイトルで『仏教研究』に掲載された翻訳の原本・イエシユー・ギェルツェン [She mchog gling yongs

‘dzin Ye shes rgyal mshan, 一七二二—一七九三の『律史 (*Dul ba'i chos 'gyung*)』(のり)の翻訳などに従事します。そのように学究活動に励む一方、一月二日には、亡命先のモンゴルからチベットへの帰途、クンプム寺に立ち寄ったダライ・ラマ十三世 (Thub bsan rgya mtsho, 一八七六—一九三三)と面会し、東本願寺法主・大谷光瑩(現如, 一八五二—一九三三)からの親書を手渡しています。以降、寺本は、日本とチベットの関係構築——彼の言葉で言えば「東亜仏教の連絡」——のために本格的に奔走することになります。一二月一五日にはダライ・ラマ十三世宛に、世界情勢・日本の状況を述べながら日本への視察使節派遣を求める書簡を作成しています。

ダライ・ラマ十三世が北京に向かうとの情報を得た彼は、一九〇八年一月に一旦帰国した後再び大陸に渡り、六月二日、五台山でダライ・ラマ十三世と再会し、八月二日と四日には、西本願寺・大谷尊由(二八八六—一九三九)とダライ・ラマ十三世との会見を実現させます。そして二月一八日には、ダライ・ラマ十三世より「トゥプテン・ソルバ (Thub bsan bzod pa)」とのチベット名を授けられるとともに、「この者がチベットを旅行する際、できるだけの援助をおこなうこと。妨害行為の類をしてはならない」との親書を手渡されます。いわば、チベットへの旅行許可書を与えられたのです。

しかし寺本は、再びチベットに向かうことはありませんでした。一九〇九年に帰国し、しばらく郷里(滋賀県鏡山)で学究生活を送った後、一九一五年から大谷大学の教授として特にチベット語を教えるようになりました。このように大谷大学の教授を務めつつ、一方で京都帝国大学、現在の京都大学でも、一九二七年までチベット語を教えました。大谷大学はもちろん、関西のチベット研究のごく初期のリーダー的存在であったのが、この寺本婉雅という人物です。さて、その寺本婉雅に対する評価ですが、日本のチベット研究の権威・山口瑞鳳氏は次のように語っています。

「寺本は抜け目がなかった」「運のいい人だった」「あるいは能海さんとは全然反対でした」と(日本人チベット行百年記念フォーラム実行委員会二〇〇三・六三—六四頁)。能海さん、つまり能海寛を山口氏は「もし彼が生きて帰っていたならば、

日本のチベット研究を大きく変えていったかもしれない」と非常に高く評価しています。そんな才能ある能海寛の対極にある人物が寺本だ、と言うのです。「抜け目がない」「運のいい」という言葉からは、悪いイメージしか伝わってきません。そんなイメージが持たれていることに因るのかもしれませんが、寺本婉雅についての研究はあまり進んでいませんでした。そもそも寺本についてはまとまった資料が、一九七四年に出版された寺本の旅行記『蔵蒙旅日記』以外に無かったのです。イメージの悪さや資料の不足が、寺本に対する研究を遅らせて来ました。

ところが、その状況は近年変わりました。近年といっても十五年くらい前、二〇〇七年ごろから新たな資料の存在が明らかとなって来ました。主に寺本の親族や、寺本が関係していた寺院に所蔵されていたものです。その中には、例えば、寺本が晩年まで自分の手元に置いていたチベット語の文献であるとか、日記であるとか、研究ノートなどがあります(三宅・高本二〇一八)。こうした資料の発見をきっかけにして、寺本が注目を浴びるようになり、現在は研究が活性化しています(近年の研究としては、石濱二〇二二、和田二〇一九、二〇二二を挙げておきます)。

二〇〇七年、富山県のある寺院に調査に伺い、そうした資料の一部を見つけた時は非常に感動しました。この調査は、先ほど小栗栖香頂について述べた際にお名前を挙げた木場明志先生の引率でおこなわれました。まず、その寺院の蔵に入らせていただきました。蔵に入って、「これが寺本に関係する資料です」として示された先にあったのは、大谷大学の図書館の二階や総合研究室に架蔵されている『大正新脩大藏經』や『国訳一切經』など、表現は悪いですが、ごくありふれたものだったのです。とはいえ、よくよく見てゆくと、その中に寺本婉雅と同時期にチベットに入った河口慧海(一八六六―一九四五)の献辞入りの『蔵英辞典』(Sarat Chandra Das, Graham Sandberg & Augustus William Heyde, *A Tibetan-English dictionary, with Sanskrit Synonyms*, Calcutta, 1902)を見つけました。「こんなのあるわ」と思いました。蔵には二階がありました。お寺の人は、「二階には何も無い」とおっしゃいました。ところが木場先生が「せっかく来たのだから徹底的に調べる必要があるだろう」とおっしゃって、二階に上がって、そこにある段ボール箱などの中身を確認し

てゆきました。そこには大きな木のお櫃がありました。その蓋を開けると、たくさんの包みが入っていました。その包みに手を触れた時に「あつた！」と感じました。そして包みを全てお寺の本堂に出して中身を見てみると、寺本が現地で蒐集したチベット語文献だったのです。そんな形で、これまで知られていなかった資料に出会うことができました。ですが、こうした出会いがあるというのも、研究の一つの醍醐味ではないかなと思います。

### 寺本婉雅のチベット研究

寺本婉雅のチベット研究上の功績ですが、第一に挙げるべきは、北京版チベット大蔵経を日本にもたらしたということでしょう。これは、先にも述べましたとおり、一九〇〇年、義和団事件に際し陸軍通訳の任を得て北京で活動していた時のことです。寺本はチベット大蔵経のうち北京版、万暦版、そして紺地金銀泥写本を入手し、これを日本に送りました。その内、万暦版と紺地金銀泥写本は皇室に寄贈し、東京帝国大学で保管されました。ところが一九二三年に起きた関東大震災で、これらは全て焼失してしまつたとされています（寺本がもたらした万暦版の一部の写真は、大正一切経刊行会編『法宝留影』一九二五年に掲載されている）。一方の北京版については真宗大学、現在の大谷大学に寄贈され、現在は大谷大学博物館所蔵となっています。この北京版チベット大蔵経は、大谷大学に寄贈されて以降、特に関西における仏教研究の重要な資料となり利用されました。そして、一九五〇年代に入ると全ページの写真撮影がおこなわれ、一九五五～一九六一年の間に洋装本の形にした『影印北京版西藏大蔵経』（総目録を含め全二六八巻）の名前で出版されました。寺本がもたらした北京版チベット大蔵経は、この「影印版」の刊行によって、日本全国、さらには全世界で研究の資料として使われるようになりました。北京版は、一冊を一人ではとても持ち運ぶことができないほど巨大なものです。用紙は横幅七十センチほどありますし、一枚一枚が厚い。一冊の上下を挟む木製の挟経板は、とても重量があります。中身も非常に豪華で、一ページ目は黒地に金泥で文字が書かれています。チベットのお経は、一ペ

ージ目に仏像を書くのが通例ですが、この北京版ではその仏像が彩色されており、非常に豪華です。こういうものが全部で三百四十冊ほどあるのです。今日の話で冒頭に名前をあげました山口益は、当時図書館に架蔵されていた北京版チベット大蔵経の偉観に心を掻き立てられて、「これはすごい」と思つてインド仏教聖典の梵藏漢諸本の対照研究、つまり彼の言う「仏教チベット学」を志すようになったと述べています（山口一九七二年・二頁）。現物の持っている力というのは非常に強いものです。山口益は現物の力に心掻き立てられて仏教研究に邁進していったわけです。

ところで非常に細かい話ですが、北京版チベット大蔵経を日本にもたらしたのは寺本なのですが、北京での第一発見者は、川上貞信（一八六四～一九三二）という本願寺派の僧侶でした（奥山二〇〇九・二九六頁）。大谷大学で最初にチベット語の授業をおこなったのは寺本婉雅と思われがちですが、実は違うのです。寺本が教鞭を取る前の一九〇一年から一九〇四年までの間、大谷大学でチベット語を教えていたのは、この川上貞信なのです。

寺本は、北京版チベット大蔵経以外にも、数多くのチベット語の文献を日本にもたらしました。それらのほとんどは「蔵外チベット文献」という名前で一括して大谷大学図書館に所蔵されています。このように寺本がもたらした、現在大谷大学図書館に所蔵されているチベット語文献の中には、面白いものが数多くあります。例えばこのチベット語訳『大乘莊嚴宝王経（*Phags pa za nu tog bkod pa zhes bya ba hegy pa chen po'i mdo*）』（蔵外 no. 12764）は、マニアックな話になりますが、本来は大きな用紙であったのを半分に切つて、その半分の紙に書き写している点が面白いです。用紙が極めて細長く、一ページに四行しか書かれていない（通常は六、七行）のはそのためです。また、これは『秘密蔵真性決定（*Gsang ba'i snying pa de kho na nyid nges pa'i*）』（蔵外 no. 13179）という密教の文献ですが、本文の行間に細かい字で注釈が書かれています。先ほど現物の力と言いましたが、この文献の場合は古いので表紙の一部が破れているのですが、その箇所を糸で縫つて修理しています。写真や複製出版されたものでは、こういうのがなかなか分かりません。実際に目にする事、触れる事によってわかります。ともかく、こういうものを見ると、「昔の人は非常にこれを大切にしてい

たのだな」というのを実感することができます。またこちらは、一八世紀のチベットの高僧レルンシエーバー・ドルジェ (She lung bzhad pa'i rdo rje, 一六九七～一七四〇) の全集の一部です (蔵外 no. 13703)。この全集は大谷大学図書館にしかありません。世界でここにしかないような貴重な文献を目にすることができる、研究することができるというのは、こうした文献をもたしてくれた寺本婉雅のおかげなのです。

最後に、寺本婉雅のチベット研究の特色を、簡単に見てゆきたいと思います。寺本婉雅のライフワークの一つは、自分もたらした北京版チベット大蔵経の全容を明らかにすること、具体的には目録を作成することでした。一九〇九年以降の郷里での学究生活の中で作成された、手書きの目録が大谷大学図書館に残っています。彼が完成を目指した目録は、単なる目録ではありませんでした。北京版以外の、例えばデルゲ版チベット大蔵経との対応や、対応するサンスクリット語原典の有無や漢訳との対応を示した目録、いわゆる「勘同目録」の作成を目指しました。チベット大蔵経は、仏陀の直説の翻訳である「カンギル」と、それに対するインドの論師たちによる注釈の翻訳である「テングル」に分けられます。そのうちカンギルに対する勘同目録——櫻部文鏡との共同研究の成果——は、寺本の生前、一九三〇年に刊行されました。テングルに対する勘同目録の作成は、その後、大谷大学で引き継がれ、一九七七年に完結しました。

次にチベット語訳仏典の翻訳研究があります。まず寺本が取り組んだのは、浄土三部経の一つ『阿弥陀経』のチベット語訳からの和訳でした。その成果は一九一〇年に「西蔵文阿弥陀経和訳」(「無盡灯」一五(六)、一～一〇頁)として発表されています。そこには、この和訳の原本が、明治三三年(一九〇〇)、義和団事件に際し北京に滞在中、雍和宮のリンチェン・ニマ (Lin chen nyima) 師より授けられた万暦年間の刊本であること、明治三五年(一九〇二)七月二〇日に和訳を完成させたと記されています(翻訳ノートが現存します。三宅・高本二〇一七・四～五頁)。浄土真宗の僧侶として、自身の所属する宗派が所依とする経典の研究は、何よりも先におこなうべきものと考えたのでしょうか。他にも寺

本のチベット研究は多岐にわたっており、経典研究のみならず仏教史の範囲にも及んでいます。例えば、先に少し触れたとおり、チベット仏教史の翻訳をしています。その翻訳を始めた時のことが彼の日記の中に書いてありますが（寺本一九七四・二〇三頁）、何故こういうものを翻訳しようと思ったかという点、当時チベット仏教史に関する史料がまだ日本に紹介されていなかったのを紹介したいという思いからだと言っています。大変面白いのは寺本の日記を見ていくと、こういう研究をしようという記述とともにセツトとなつて出てくる言葉があるのに気付きます。それは何かというと、「東亜仏教の連絡」という言葉です。寺本のチベット研究の一つの特色、特にチベット滞在時のそれは、「東亜仏教の連絡」、つまりアジアの仏教国の連帯という目的達成の一種の手段であったという点にあると私は考えています。

他にも寺本はチベット仏教だけでなく、最初に紹介したボン教についても研究をおこなっています（なお、寺本とともに日本人として初めてチベットに入境した能海寛も一九〇〇年にボン教経典『*g.Yung drung ishe dpog tu med pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*』の翻訳を試みるなど、ボン教に対する研究をおこなっています。Miyake 2018 参照）。彼は一九〇六年に、ボン教の経典『十万白竜（*Klu 'bum dkar po*）』の和訳を発表します。この時彼は、インドから仏教が正式に伝わってくる前に既にインドから大乘の教えが伝わっていて、それと民間信仰が融合したのがボン教だと書いています。ところが『十万白竜』が出版されて二十年ほど経って、一九二三年に刊行された『世界聖典全集 後編 第一五巻』のボン教の項目の中で彼は、『十万白竜』の時に書いたボン教観を出していません。トゥカン・ロプサン・チヨキ・ニマ（*Thu'u bkwan Blo bzang chos kyi nyi ma*, 一七三七～一八〇二）が著した『一切宗義』という文献に依拠し、ボン教の三段階発展説、つまり、今あるボン教は仏教の影響を受けて成立したものだという説を提示しています（辻二〇二二）。このあたりは非常に面白いなと思って見えています。

## おわりに

仏教の研究というと、まず何より、仏典に向き合うという方法があります。仏典の中には物語性のあるものが多く、そうした点に気づくと、読んでいて実に面白い。その一方で、仏教に注目した先人の跡を辿っていくというのも面白いものです。先人がどのように研究してきたのか、どんな思いで研究してきたか、それを自分の学びのモチベーションにつなげるという方向性もあると思っています。

私は、寺本に非常に共感を得るところがあります。これは寺本が晩年に書いたと思われる書なのですが、中央に「佛心者大慈悲是(佛心は大慈悲是なり)」と書いてあります。その上に書いてあるのはチベット語・チベット文字です。チベット文字の草書体で書いています。何と書いてあるかということ、「サンギー・キュ・セムニユツ・トウクジエ・チェンポ・イン (sangs rgyas kyi sems nyid thugs rje chen po yin)」——「仏陀の心の本性は大悲である」と書いてあります。寺本は自分の著書の表紙に、自分で書いたチベット文字を入れています。しかも草書体が多い(例えば、『仏説無量寿経・仏説阿弥陀経・藏漢和三訳対校』『唯識三十論疏・梵藏漢和四訳対照』など)。私もチベット文字を書くのが好きなので、そういう点からも寺本に共感を覚えることがあります。一方でこういうものを見ると、寺本は、晩年までチベットが本当に好きだったのだらうなと思います。日記の中ではチベットに対してあまりいいことを書いていないのですが、やっぱり好きだったのだらうなという気持ちで非常に伝わってきて、そのあたりは共感するところではあります。以上、ちよつととりとめもない話になってしまいましたが、今日はこれで終わりにしたいと思います。ありがとうございます。

## 参考文献

石濱裕美子(二〇二二)「明治期チベット・モンゴル出身「留学生」の特異性について」『九州大学東洋史論叢』四九、一―三〇頁。

稲葉正就（一九六九）「大谷大学図書館所蔵の蔵外チベット文献について（講演要旨）」『大谷学報』四八（二三）、八五～八七頁。  
奥山直司（二〇〇九）『評伝 河口慧海』（中公文庫）、中央公論新社。

木場明志（二〇〇四）「教法のため人びとのため…小栗栖香頂師の事績」『小栗栖香頂師百回忌法要記念 教法のため人びとのため…小栗栖香頂師の事績』妙正寺、一～四四頁。

高本康子（二〇一〇）『近代日本におけるチベット像の形成と展開』芙蓉書房出版。

高本康子（二〇一四）『寺本婉雅関連資料の現在…寺本家資料を中心に』『論集』（四一）、二一～三六頁。

高本康子（二〇一六）「海闊天空…五台山以後の寺本婉雅」『シルクロードと近代日本の邂逅…西域古代資料と日本近代仏教』荒川正晴・柴田幹夫編、勉誠出版、五〇一～五二二頁。

高本康子・三宅伸一郎（二〇一四）『寺本婉雅日記』『新旧年月事記』翻刻』『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』（三一）、一四三～一八六頁。

辻奈々子（二〇二二）『寺本婉雅のチベット研究にみられる特徴について』大谷大学文学部国際文化学科二〇二〇年度卒業論文。

寺本婉雅（一九七四）『藏蒙旅日記』横地祥原編、芙蓉書房。

陳継東（二〇一六）『小栗栖香頂の清末中国体験…近代日中仏教交流の開端』山喜房佛書林。

日本人チベット行百年記念フォーラム実行委員会（二〇〇三）『チベットと日本の百年…十人はなぜチベットをめざしたか』新宿書房。

三宅伸一郎（二〇〇八）「日本人初の入蔵者・寺本婉雅に関する新出資料について（二〇〇七年度大谷学会研究発表会発表要旨）」『大谷学報』八七（二）、四一～四四頁。

三宅伸一郎・高本康子（二〇一八）『寺本婉雅に関する「宗林寺資料」「村岡家資料」に対する総合的評価』『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』（三四）、一～一九頁。

山口益（一九七二）『山口益仏教学文集 上』春秋社。

和田大知（二〇一九）『寺本婉雅の対チベット活動とその人物像』『史滴』（四一）、二二五～二〇三頁。

和田大知（二〇二二）『寺本婉雅』『西藏蒙古旅行に於る報告』（一九〇五年）翻刻』『九州大学東洋史論集』四八、一～五六頁。

Miyake Shinichiro (2009) "Ō tha ni gtsug lag slob grwa chen mo'i bod yig zhib 'jug skor rags tsam brjod pa", Hildgard Diemberger & Karma Phuntsho (eds.), *Ancient Treasures, New Discoveries*. Halle: International Institute for Tibetan and Buddhist Studies GmbH, pp. 195-221.

- Miyake Shin'ichiro (2018) "A Brief Study on the Bon-po Sutra, g.Yung drung tshe dpag tu med pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo", *Journal of Tibetan and Himalayan Studies* 3(1), pp. 49-61.
- g.Yung drung phun tshogs (2018) "Nyi hong gi bon po zhib 'jug thog ma nas 'phros pa'i gtam", sTong skor Tshe ring thar & Shar gzhon Tshe ring zla ba (eds.), *mDo dbus mtho sgang gi gna' bo' i shes rigs. pe cin rgyal spyi' i zhang zhung rig gnas zhib 'jug tshogs' du skabs dang po' i dpyad rtsom phyogs bsgyis. stod cha* (青藏高原的古代文明：北京首届國際象雄文化學術研討會論文集一). mTso sngon mi rigs dpe skrun khang (青海民族出版社), pp. 364-379.